

特集  
国際協力の未来  
～豊かな国際社会の形成を目指して～

Special Features  
The future of international cooperation  
Aiming to form an affluent international community

現在を知る  
Knowing the present

## 被援助国カンボジアでの国際協力

～悲劇の時代を乗り越えて～

チア・ノル

CHEA NOL

NGOアンコール遺跡の保存と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構代表



私は日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)に所属し、祖国カンボジアのアンコール遺跡修復・保全活動に携わる傍ら、近郊農村住民の自立をサポートするNGO「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構(JST)」の代表として活動している。

現在、カンボジアは様々な国からの支援を受け、国としての形を整えつつあるが、被援助国となった歴史的背景、復興の過程、市民レベルの小さな取り組みを、私が歩んできた40年の人生を紹介することによって振り返ってみたい。

### 1—私が育ったカンボジアという国

私は1966年、アンコール遺跡のあるカンボジアのシェムリアップに生まれた。カンボジアは1953年にフランス植民地支配から独立し、国家元首シハヌーク国王指導の下で平和な日々を送っていた。フランス統治時代の影響を色濃く受け、首都プノンペン<sup>しゅうしやう</sup>は当時「東洋のパリ」と呼ばれるほど瀟洒で魅力的な都市であったという。カンボジア全体が一年中温暖な気候に恵まれているため、各家々の庭には果物が豊富に実り、池や川に網を張れば魚が採れ、雨期には蛙やコオロギなどをつかまえて……と農村部の住民も最低限食べ物には困らない生活を送

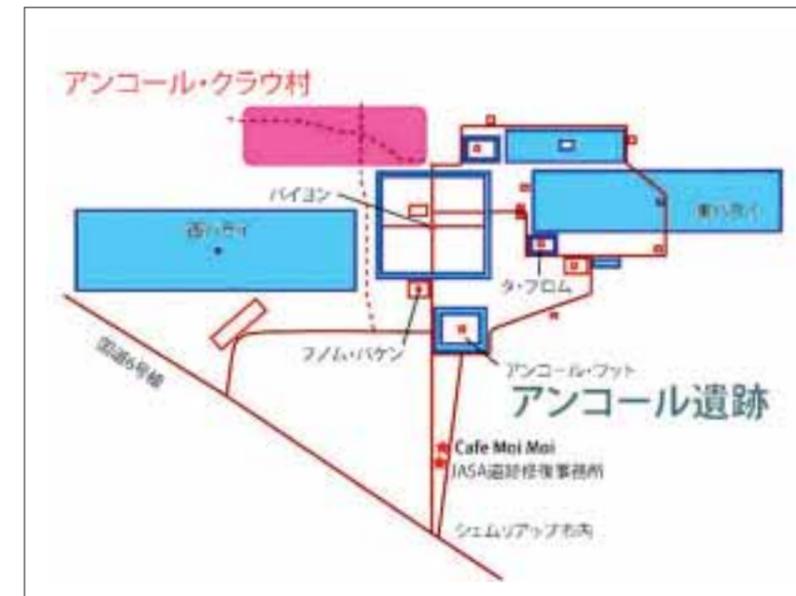


■写真1—世界的に有名なアンコール・ワット(写真 塚本敏行)

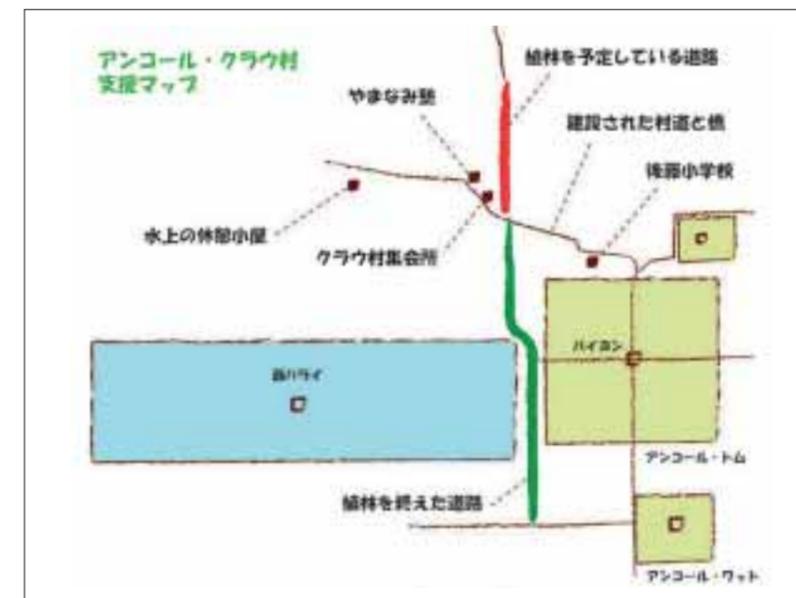
っていた。

ところが1970年、シハヌーク国王が外遊中、ロン・ノル将軍がクーデターを起こしたことから、カンボジアの運命は一変する。同じ頃、隣国ベトナムではアメリカとの戦争が続いており、ロン・ノル政権がこれに加勢立てたことにより、国内の状況はますます混乱に陥った。その結果、共産勢力が農村地域を中心に解放区を広げ、ついに1975年、クメール・ルージュ(共産主義)の指導者ポル・ポトがロン・ノル政権を倒し「民主カンボジア政府」を樹立した。

ポル・ポト政権は、極端な共産主義社会を急進的に建設するため、まず知識層を、そして都市部に居住していた者、読み書きができる者をも処刑の対象とした。また、病院、学校、市場、貨幣、郵便制度などを廃止し、仏教信仰を禁止した。私の家族も、医師であった父と二人の兄は早くに連行され、殺害された。当時小学3年生だった私は革命教育を受け、牛飼いやダム建設の労働に強制的に参加させられたりしながら、わずかな配給食糧で命をつなぐ日々を送っていた。外国からの情報はすべてシャットアウトされ、世界中どこへ行っても同様の社会体制であると叩き込まれていたため、上層部の命令に従い、不満をもらさずに働くのみ



■図1—アンコール地域マップ



■図2—アンコール・クラウ村支援マップ



■写真2—解体作業中のアンコール遺跡



■写真3—遺跡修復に使う石材加工作業

の、暗黒の日々が続いた。毎日のように処刑の対象者が連行され、病死する者も後を絶たず、ポル・ポト時代の3年8ヶ月で150万人以上のカンボジア国民が犠牲になったといわれている。このような悲劇の時代は1979年、ベトナム軍とポル・ポト派の離反者の反撃によって幕を閉じることになる。

## 2—日本に逃れて

「このような混乱の歴史を繰り返すカンボジアに未来はあるのだろうか」「生き残った一人息子も近い将来

兵士として戦地へ送り込まれるだけではないのだろうか」などと思悩んでいた母のもとへ、国費留学で日本へ渡ったまま消息が途絶えていた甥からの手紙が届く。その中には、もし生き残っている家族や親戚がいれば、ぜひ日本へ来てほしいと書かれていた。

奇跡的に日本から私たちの故郷に届いた手紙。結局、私と従兄弟の子供3人で国を脱出することになり、まずはタイ国境の難民キャンプへ向かうことになった。しかし、タイ国境近くは、いたるところに地雷が埋められ、ポル・ポト派残党ゲリラに襲われる可能性の高い危険地帯であった。そのような中、私たち3人は、母が内戦中にこっそり地面に埋め隠していた貴金属を、靴底や下着の裏に縫い付けて隠し持ち、それらを案内人に渡しなが



■写真4—村人がつくった橋を渡る牛と子供たち

がら、なんとかタイのカオイダン難民キャンプにたどり着くことができたのである。途中、地雷を踏みそうになったり、不衛生な状況におかれていたために目が開かなくなったり、頼みの綱の案内人が行方をくらましたりと、まさに命がけの脱出であった。

こうして私は1980年9月、日本の地を踏むことになった。日本では難民定住促進センターにて3ヶ月の日本語教育を受け、同時に日本での生活の仕方を学んだ。そして、最終的に東京吉祥寺のカトリック教会神父が里親になり、地元の小学校に入って5年生から教育を受けることになった。

しかし、平和で豊かな日本に着いてホッとしたのも束の間、同級生のいじめに遭い、精神的につらい毎日を通



■写真5—村人による村道の建設



■写真6—村人による植林作業



■写真7—NGOでつくった製品



■写真8—NGOサポーターによる日本での製品販売

ごすことになる。難民というだけでさげすまれ、屈辱的な言葉を浴びせられ、時には無視され、しかし、それに対して説明できる日本語力を持たない自分……。そのような中、特に学校の先生方は、いつも私たちの立場を気遣い、放課後に日本語を教えてくださいと、相談に乗ってくださいました。近所の方々からは料理の差し入れがあったり、学費を貸してくださる方がいらしたりと、暖かい心遣いに支えられ、また何よりも里親の強力なサポートのおかげで、私はその後、日本で中学、高校、大学と進学することができた。

## 3—日本国政府アンコール遺跡救済チームでの活動

1990年初頭、カンボジアの停戦と和平交渉に大きな役割を果たした日本は、1993年、内戦後はじめての総選挙を監視するために、PKO(国連平和維持活動)に参加し、新政権樹立に導くなど、カンボジアの平和と復興に向けて、なくてはならない存在となっていた。さらに日本は、道路、橋などのインフラ整備、教育、医療などをは



■写真9—村の景勝地につくった水上小屋

じめとする様々な分野の支援を行うと共に、文化面の支援、人材育成支援の一環として、1994年よりアンコール遺跡保存修復の支援を開始しようとしていた。アンコール・ワットをはじめとする遺跡群は、1992年、世界遺産に登録されると同時に、世界危機遺産にも指定され、緊急の対応が必要とされていたのである。

ちょうど私が日本の大学を卒業した直後のことであった。祖国カンボジアに戻り、故郷シェムリアップにあるアンコール遺跡の修復事業に、日本チームのメンバーとして加わることができるという、願ってもない話がやってきたのだ。以来、私はアンコール・ワットやアンコール・トム内の遺跡修復工事に関わり、日本人専門家とカンボジア人専門家、地元作業員、政府役人関係者などの間に入って調整役を務めさせてもらっている。

日本国政府アンコール遺跡救済チームは、遺跡を目に見える形で修復するだけでなく、ポル・ポト時代に殺害され一掃されたカンボジア人の専門家および技術者の育成に特に力を注いだ。そして、結成から10年以上たった現在では、カンボジア人自らの手で遺跡修復事業を進めることができるまでに至っている。さらに、カンボジア人の心の糧、誇りであるアンコール遺跡を甦らせるというプロジェクトは、何よりもカンボジア一般市民に、自信と笑顔を取り戻すきっかけになったと感じている。

## 4—近隣農村地域での活動

祖国カンボジアでアンコール遺跡の修復事業に関わるようになり、私の小中学時代の恩師や知人、里親、学費をサポートして下さった日本の方々、カンボジアへ遊びに来てくれるようになった。中にはカンボジアのために何か役立ててほしいと寄付金をおいていかれる方もあり、そのようなことがきっかけで、遺跡に近いアンコ



■写真10—水上小屋での昼食を楽しむ外国人観光客



■写真11—のどかな村の風景

ール・クラウ村周辺での、私の個人的な活動が少しずつ始まることとなる。

最初は病気で困っている住民に病院に通うお金、薬を買うお金を用立てることから始まり、やがて村の小学校の建設、先生方への給料支給、教材の配布をはじめ、村の道や橋、集会所を村人と一緒に建設したり……と約10年にわたり支援を続けた。その結果、村の生活は少しずつ向上してきたことが実感できるようになった。

日本では存在するのが当たり前とも思われている道路だが、たとえ車がやっと1台通れる幅の道でも、なかった頃は、急病人が出て町へ運ぶことができず、また、雨期に川が増水すれば、仕事に出かけるにも危険を伴うような環境で村人は生活を続けてきたのだ。そのような様子を見るにつれ、最低限のインフラ整備の重要性を実感した。

#### 5—村の自立に向けての試み—NGO設立と職業訓練

日本の皆様からいただいた支援で、村の環境は向上した。しかしながら、より持続的に活用していく必要性も感じていた。例えば、小学校も道路も、一度建設すれば終わりというわけではなく、毎年のメンテナンスが必要となってくる。特にカンボジアは乾期の直射日光が強く、また雨期に降る集中豪雨により、建物も道路も日本以上に傷みが激しい。しかし、そのような公共設備のメンテナンスに対する費用は、生きていくことに精一杯の状態である村人が負担できるものではなく、だからといって安易に外部からの支援金に頼るのも、結局は村人の自立心をそぐことになりかねない、と考えるようになった。

そのような中、村の自立への試みの一つとして、織物、石彫、窯業などの職業訓練設備をつくり、そこで生産された製品の販売により得た収益は、地域の公益として、

地域に必要な道路、学校、保健所など、生活環境を整備することに使用する、という案が浮上した。そこで、2005年6月、アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構は、カンボジアNGOとして正式登録し、まずは村の女性のための織物職業訓練を開始し、そして2007年からはカンボジアの若い陶芸家と窯業従事者の自立へつながる支援を始めることとなった。

しかし、職業訓練によって生産された製品は、販売し現金化できなければ、持続的に活動をしていくことができない。そこで、2005年8月、アンコール・ワットに近い公園内に観光客向けのカフェレストランを開き、そこに土産物コーナーを併設し、NGOでつくった製品を販売することになった。さらに、NGOサポーターが日本での製品販売に協力してくださることもあり、今後への道筋が少し見えてきたところである。

今までカンボジアの農村部で細々とつくられていた製品は、デザインなどに少し手を加えれば、魅力的な商品



■写真12—水牛の群れ



■写真13—アンコールやまなみ塾での授業風景



■写真14—授業を受ける子供たち

に生まれ変わる可能性を秘めている。現在では、他の農村支援NGOともコラボレートして商品開発を行ったり、独自のパッケージに入れたカンボジアの昔ながらのお菓子を販売したりするなど、カンボジア商品の販売の可能性を探っている段階である。

#### 6—村の自立へ向けての取り組み

一方、村のありのままの姿を観光資源として活用する試みも開始した。まずは、村の景勝地に水上の休憩小屋をつくり、外国人観光客が昼食を楽しみながら村の雰囲気体験できるような場所を整えた。カンボジアの田園風景が広がる中、農民が田仕事や魚捕りをし、子供たちは水浴びをしたり、牛の群れを追っていたりする。自然の風景と人々の営みを眺めながらのんびり過ごす、という素朴な試みだが、だからこそというべきか、遺跡以外の現地の農村生活に触れることができたことで、カンボジアをより身近に感じ、機会があればまた訪れたいという旅行者が増えるようになった。

さらに、独自の企画を試みる方々もでてくるようになった。例えば、村でのホームステイ、村の子供たちとの交流、記念植樹などなど。今までは、海外からカンボジアへという一方向の支援で終わっていたものが、このように村の魅力そのものを外国人観光客にアピールすることによって、対等な立場での相互コミュニケーションが生まれ始めている。

2006年5月、日本のNPOの支援によりアンコール・クラウ村に完成した村の子供たちのためのフリースクール「アンコールやまなみ塾」では、村出身の若い英語の先生の指導のもと、毎日5つの英語クラスが運営されている。村の子供たちが英語などの外国語を習得できれば、将来、町で観光業やホテル業、レストラン業などの職業に

従事したり、遺跡保存修復の仕事に就いたりするなど、仕事を増える機会が増えるだろうと、村の住民からは大変な期待が寄せられているところだ。実際、開校から2年近くたった今、村の中学を卒業し就労年齢に達した青年たちは、英語が話せるタクシードライバーやガイドとして、生き生きと仕事に励んでいる。また、前出のカフェレストランや織物職業訓練所で働き始めた女性たちもいる。

今後は、村としてエコツーリズムや体験型ツアーなどを企画し、アンコール遺跡を訪れる旅行者にさらに積極的にアピールしていく予定である。そして、村人自らによって生み出された利益で、学校や道路の毎年のメンテナンスを行うこと、さらには保健所をつくること、村としての当面の目標である。

豊かな自然、伝統文化、人々のぬくもり、子供たちのとびっきりの笑顔……といった魅力を活かした農村地域の新たな試みは、住民の自立を促すと共に、観光都市としてのシムリアップの成長にも、調和のとれた発展をもたらすものとして期待されるだろう。

#### 7—国際協力の第一歩

私が現在行っているこのような活動は、「国際協力」という粗上にのらないほどの微力なものだと思うが、規模の差はあれ、まずお互いを知り、理解し、相互に尊重し合うことからすべてが始まるのではなかろうか。さらに極端にいえば、身近な隣人との付き合いから、すでに国際協力の第一歩は始まっているともいえるのだ。

祖国カンボジアが少しずつ発展してきた現在、私自身も、ようやく過去のカンボジアでの、また、日本でのトラウマから開放されたところである。今後は、より多くの方々にカンボジアという国の魅力を知ってもらうために、活動を続けていきたいと考えている。